

**【拠点形成概要及び採択理由】**

機 関 名	東京大学
拠点のプログラム名称	死生学の展開と組織化
中核となる専攻等名	人文社会系研究科基礎文化研究専攻
事業推進担当者	(拠点リーダー) 島 藺 進 教授 <span style="float: right;">外 1 2 名</span>

**【拠点形成の目的】**

本研究拠点は、古今東西の死生観の比較研究や死生の価値についての理論的研究を踏まえつつ、現代社会の死生の現場、ケアや臨床の現場に生起する諸問題に応答することを通して、以下の諸点全体を射程に入れた、他に類例を見ない世界最高水準の研究教育拠点の形成を目指す。

まず、世界の諸文明において、死生の知や実践がどのような形をとっていたかについて、人文学の伝統を踏まえた考察を進める。人類が死とどう向き合ってきたか、死者と生者がどのような関わりをもってきたかを、比較文明的な展望をもって研究する。また、応用倫理、とりわけ生命倫理の諸問題は死生学と深く関わり合う。人間の尊厳、いのちの尊さ、死とは何か、死生に関わる問題についての意思決定のあり方などの諸問題に理論的考察を加え、生命倫理をはじめとする応用倫理・道徳哲学が直面する諸問題に死生学の立場から寄与することを目指す。そして、医療現場でのケアの実践や臨床的な知の諸問題に答えていく。喫緊で顕在的な課題である「死にゆく人びとに対するケアのあり方」を問い、そこで発せられる切実な求めに適切に対応するとともに、その課題を広い学知の中に位置づけるべく、「死生のケアに関わる臨床哲学的な知の提供」を目指す。

さらに、死と生が不可分のものとしてあることの認識に基づき、ケアや養育の現場で求められる知の学問的基礎づけを行う。このように広く死生をめぐる諸問題に応じようとする学は、死にゆく人びとの周辺の課題のみを取り上げてきた従来の死生学 (Death Studies) の限界を超え、死生の現場・いのちの危機の現場を広く取り巻く問題状況全体を見渡しつつ、人文社会系の諸学の成果を総合した、学際的な知を展開・組織化していくことを目指す。

**【拠点形成計画の概要】**

21世紀COEプログラム「生命の文化・価値をめぐる死生学の構築」(略称「死生学の構築」)によってなされた死生学の基礎構築を踏まえ、死生学研究の展開を進めるとともに、学として、また人材育成システムとしての組織化を推進する。

以下の3つの分野において、**死生学の展開**を推し進め、世界的な水準の研究拠点としての内実を整える。

**(a) 死生の文化の比較研究**——世界の諸地域の古今の死生観を表す思想・文芸、形象文化等の研究、また死や生殖・誕生、死生の循環をめぐる儀礼や習俗等の研究、さらには死者の記憶や追悼に関する研究を進め、広く諸文明の研究を重ねてきた日本の研究拠点ならではの成果を内外に提示する。

**(b) 死生の倫理や実践に関わる理論的哲学的考察**——現在の欧米の死生学や生命倫理学をはじめとする実践哲学の達成を踏まえ、その批判的な検討を深めるとともに、日本の状況を踏まえた独自の考察や伝統に立脚したケア実践や倫理の理論の構築を目指す。

**(c) 人文学の現代的実践現場への関与**——人文学の伝統を踏まえつつ、狭い意味での教養のための学や象牙の塔の専門知という限界を超えて、現代的な実践現場に関与していく知の形成のための方法的省察を深め、それを実践していく。死生学のフィールドワークや調査研究的な部門において一定の成果をあげ、人文学が臨床的な知として機能する場を組織化する。

以上のような学問的内実が達成されるとともに、**死生学の組織化**を進め、世界的な研究拠点としての実質を備えることを目指す。日本から発信する死生学として、独自の貢献を明確にしていく。また、①大学院の後期やPDの段階での死生学教育を強化し、関連諸分野の若手研究者が死生学の分野で十分な実力をもつことができる体制を築くとともに、②大学院において死生学の専門的研究者の育成がなされるような体制の組織化を進める。より、具体的には以下の諸課題が追求される。

**(i) 死生学の諸領域における知の組織化**——21世紀COEにおいて構築した死生学の基礎を踏まえ、死生学の学的体系化・組織化を推し進める。そのために内外の最先端の研究者を招聘し、死生学の学的深化を進め、その成果を刊行していく。生命倫理等、応用倫理の諸問題を人類史を見渡した広大な知的視野のもとに捉え直していく学として本拠点の死生学は構想されている。古今東西の死生の文化についての研究の分厚い蓄積を土台として、欧米やアジアの研究者との交流を通じて多面的な比較研究を行い、世界最高水準の死生学の組織化を行う。

**(ii) 多分野の研究者やケアの現場に関わる人々との知的交流**——人文社会系の諸学のみならず、医学、教育、法学等、死生の知に関わる多様な分野の研究者との知的交流を進めることによって、人文学を基礎としつつも生活の現場に近い学知としての死生学の組織化を進める。そのために、死生のケアの現場や死生に関わる意思決定の現場で実践的な問題に取り組んでいる専門家や市民との知的交流を進める。

**(iii) 大学院生や若手研究者による次世代の死生学の基盤形成**——大学院生やPDレベルの若手研究者による研究活動を推し進め、伝統的な死生の知がますます機能を失うであろう未来を、また高齢化社会による死生観の変動のかなたを見すえた新たな死生学の基盤を形成する。多様な分野の若手研究者が恒常的に刺激しあうような研究教育環境を作り出すとともに、彼らが国際的な研究交流に頻繁に参加できる研究環境を構築する。

機 関 名	東京大学
拠点のプログラム名称	死生学の展開と組織化
<p>〔採択理由〕</p> <p>本拠点プログラムは、21世紀COEプログラムにおける死生学の構築を受け継いで、死生学の確立発展と実践への深化を図ろうとする意義あるプログラムである。拠点となる大学は全学的な組織として、COEプログラム推進室を中心とする充実した教育研究支援体制を確立しており、また、本プログラム自身の運営マネジメント体制も優れていると評価できる。5年間のプログラム終了後の本事業の継承についても、明確な方針のもとに受け皿となる組織において引き継ぐことが示されている。</p> <p>本プログラムで研究する若手研究者の経済的支援については、大学独自のRA制度を検討するとともに、プログラム終了後のキャリアパスについても十分な配慮を示していること等、若手研究者の研究能力を発揮しうるための基盤が準備されている。</p> <p>本テーマの死生学は、欧米型死生学ではなく、アジアの伝統を踏まえた日本独自の死生学の構築を目指す点に独創性が認められる。</p> <p>要望される改善点としては、アジアの研究・教育機関との協力体制の更なる整備、この拠点計画と実践の医療現場との更なる連携などである。そして、人文学というレベルに限られない、更により総合的な視野からのアプローチの追求も求められている点である。</p>	